
紋章の姫の下剋上

四季彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紋章の姫の下剋上

【Nコード】

N1344Z

【作者名】

四季彩

【あらすじ】

ラクエラ国の王位継承者、セーラ・ラクエラ・スカイティ。

優しく聡明で美しい彼女を襲う突然の不幸…彼女は自身の特殊な生まれをいかし、立ち向か…えたらいいな！

第一話（前書き）

初めて小説を書くのでつたない箇所があると思いますが、
生暖かい目で見てください。幸いです。

第一話

「姫様だわ!」

「姫様だ・・・キレー・・・」

「本物の姫様だよ母さん!」

「本当にお美しいねえ・・・」

絹糸のような美しく長い髪。夜空を切り取ったような深い藍の瞳。それを覆う長い睫毛。

瞳より淡い藍のドレスに身を包み、薄い布で両腕を覆っている。国民の目がすべて彼女に向けられているといっても過言では無い。

しかし彼女の落ち着き様は、神々しささえ感じるほど。

口元に笑みを浮かべ立つその姿を、国民は目に焼き付けた。

今日はラクエラ国の姫君、セーラ・ラクエア・スカイティの16歳の誕生日である。

城のバルコニーから国民に笑顔で手を振るセーラ。

ラクエラ国の王位継承者である彼女は、こんな場にあるはずのない鋭い殺気を感じていた。

王位継承者という立場や美しい見た目から、殺気や悪意には慣れている。

ただ、この殺気と悪意は、普段の比ではなかった。

「ごめんなさいお父様・・・まだ皆さんの顔を見ていたいのだけ
れど・・・」

「おお、人に酔ったのかも知れんな。戻っていなさい。」

「はい・・・ありがとうございます。」

国王にそう告げ、顔を伏せるセーラ。
最後に手をヒラリと振って、彼女は自室へと戻って行った。
それを見て自宅に戻った国民もいるとか、いないとか・・・。

「はぁ・・・」

薄い布をメイドに預け下がらせると、ドレスのままベットに倒れこむセーラ。

「（あんなに強い殺気は久しぶり・・・信頼を得ていると思っ
たのに・・・）」
目を腕で覆い、体を丸める。

「（今日のうちにでも・・・殺しにくる）」

特殊な生まれ・・・特殊な紋章の宿るセーラだから解る、殺気
の度合い。

あれはすぐにも行動に移すだろう。

「（城の警備は安心していい・・・何度も助けてもらっているし。）」

「
忘れてしまおうと、目を閉じて眠る体制に入るセーラ。」

彼女は気づいていない。

殺気を向けてきた相手が国民ではなく、上位の立場にいる家臣達
だったことに。

第一話（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
亀更新ですががんばります。

第二話（前書き）

第二話です

なかなか話が進みませんが、長い目で見ていただけると嬉しいです

第二話

sideセーラ

うつすらと目をあけると、まだ薄暗い空が窓から見える。
シワのよったドレスを見て、昨日そのまま寝てしまったのを思い出した。

随分値の張るものだった気がして手でシワを延ばしてみるが無駄のようで、

あきらめてベットから降りた。
目がさえて、二度寝は難しい。

「昨日の夜には行動に移すと思っていたのですが・・・」

安堵の息が口からこぼれ出る。

唯一の王位継承者の私が死ぬなんてことは、あつてはならない。

今日か明日、そうでなければ明後日。

長くても三日以内に、きつと殺しにくる。

その間に私は、生き残る術を考えておかなくては。

城の・・・特に国王や王妃の上位の者の部屋は警備は強い。

争い事を無くした今でも最強を誇るラクエラ国の騎士団がいる。

騎士団長は幼馴染の大親友といってもいいほど仲がいいし、

(私の秘密を知っているという面では悪友かもしれないけれど)

私を狙う刺客とあれば、騎士団総動員で城の警備にあたってくれる

だろう。

この部屋から逃げる手段も確保しておいたほうがいい。

肩から下げる形のバックに、必要なものを詰め込んでおく。

・・・一応ナイフもいれておこう。

・・・ただ、逃げるとして。

これは相手はかなり強い場合の話になってくるのだけれど、

城以外に逃げなければいけないとき、アダになってくるのがこの両腕。

両腕にある、この紋章だ。

肘から手首まである羽のような紋章は、現国王と私だけが持つ証。

いつのまにやらふんわりと浮き出てきたらしい・・・

正直目立ってしょうがない。

長い髪の毛は縛るか帽子の中に隠せばいい。最終手段としては散髪。

少し黒っぽい瞳は、珍しいが探せばいるかもしれない。最終手段と

しては帽子で隠す。

顔立ちは・・・これも帽子で隠す。

腕は・・・まあその時が来るわけでもなし。きっと騎士団が守ってくれるだろう。

そこまで考えて、色々と行動して疲れたようで再び眠気が襲ってくる。

次起きたら、事が収まっている事を祈って、ドレスのままベットに倒れこんだ。

第二話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
次話では話がやっと進むと思われます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1344z/>

紋章の姫の下剋上

2011年12月10日01時50分発行